

付 章

『盛岡市下厨川小屋塚遺跡調査略報』

草 間 俊 一

I 調査に至るまでの経過

昭和43年5月7日岩手大学4年久保泰君が研究室を訪れ、次の如き報告をした。「厨川にアルバイトの作業に行ったところ、道路脇の断面に本年春3月北上市樺山で調査した竪穴住居跡の断面らしいものがでている」

そこで、同月10日久保君に案内されて、現地をみたが、樺山の如き竪穴の断面か、後世厨川柵関係のピットの断面か判断に迷った。その続きの畑を同月14日に久保君が3年生の鈴木隆英君と試掘したところ、類似の円形の竪穴らしい輪郭のある部分を発見、その部分を少し掘り下げると、土器が出土したので、樺山と同じ竪穴住居跡であるとの確信をもって、小生に報告した。

5月14日直ちに、盛岡市公民館吉田義昭主事に連絡、市教育委員会と共催して発掘調査の手続きをとるよう依頼した。一方調査時期の関係もあるので、5月18日(土)考古学実習を兼ねて調査し、更に5月25日(土)5月26日(日)の両日も現地調査を行った。

市教育委員会からは中村係長を通じて、共催願と発掘届を提出して欲しいとの連絡を受けたので、5月25日付けで発掘調査共催願、5月30日付けで埋蔵文化財発掘届を提出した。その後、地主が多く、承諾書を得るのに手間どったので、実際の届出は若干おくれた。

II 発掘調査の計画と実施

1 発掘主催者

岩手大学教養部長 関 文香

盛岡市教育委員会教育長 中村 圭六

2 発掘担当者

草間 俊一 岩手大学教授 岩手県文化財専門委員

吉田 義昭 盛岡市公民館主事 日本考古学協会員

3 発掘協力者

盛岡市城西中学校 及川 二男

盛岡郵便局 武田 良夫

岩手大学文部技官 高橋 哲郎

岩手大学教育学部日本史研究室所属学生

4年生 久保 泰 菊池 忠昭 川又 正則 加藤 邦忠 斉藤 哲 熊坂 寛

3年生 鈴木 隆英 有住 保 佐藤 徳子 伊藤 幸子 小島 里子 桐生美佐子

2年生 四井 謙吉 吉田 洋

岩手県盛岡第三高等学校社会科研究部員

盛岡市立城西中学校社会科研究部員

4 発掘調査予定地及地主名

盛岡市下厨川字小屋塚20番地11号

地主名 岩手地所K.K. 野中 賢幸 大関 重雄 高橋 和徳 菊池 国夫 西川 善三
小成 薫 吉田 勝蔵 藤原 安三 藤原 英典 千葉 平治 (順序不同)

5 発掘予定地の現状と面積

畑として耕作されていた土地で有るが、宅地予定地となって荒地となっていた。面積約25アールのところ10アールほどの面積を調査予定地とする。

6 発掘調査の期間

届出では6月15日～7月7日まで、土・日を主として行うことにしたが、準備も遅れたので、実際には試掘した5月14日より7月31日まで、土・日を主とし、7月20日以後31日までは連日調査した。調査の一部は8月まで残り、調査した。

Ⅲ 調査の経過

このような畑に多数の竪穴住居跡の所在するものを調査する場合、調査を予定した10アール全体の地表面を40～50cmの厚さで、ベルトコンベアなどを使って除去し、竪穴住居跡の分布状態を調査して、一つ一つの竪穴の精細な調査を行うのが正式な調査方法であるが、調査経費その他の事情もありトレンチと小ピットによって竪穴の所在を確かめ、それを順次調査する方法をとった。従って竪穴分布の全貌はこれを明らかにすることは出来なかった。

しかし、10の竪穴住居跡と道路の断面に発見された6つの竪穴(第1図A～F)とを発見することが出来た。恐らく、この25アールほどの畑には30以上の竪穴が存在すると推定された。

次に、調査した9つの竪穴について、調査した順に1・2・3と番号を付けて述べる。

Ⅳ 竪穴住居跡の状況

(1) 第1号竪穴住居跡

小さいフラスコ形ピットと云われる竪穴の形をしたもので第2図は第1号跡をもとに典型的な形を示したものである。

地表面を60cmの厚さで除去すると竪穴の輪郭が発見される。それまでは黒土層ではっきり出ない。穴の大きさは東西1.65m、南北1.3mの楕円形であった。竪穴の深さははっきりした穴の淵より1.7mあり、地表面からは2.3mの深さがある。

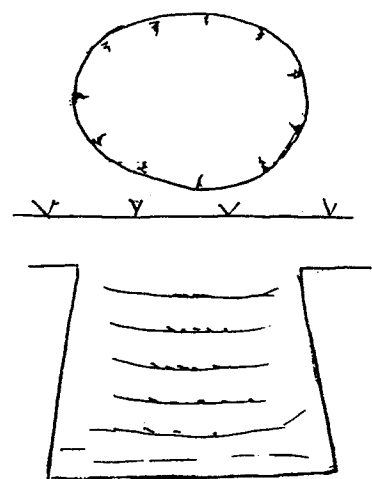
この小さいが、深い竪穴の埋没状態は何層にも文化層が認められるが、時期的に殆ど差異が認められない。

この第1号跡からは形のとれる土器が発見されている。

(2) 第2号竪穴住居跡

東西2.2m×南北2.4mの竪穴で、表土より60cmの厚さのところ、輪郭があらわれた。深さ2.1mで、竪穴の床面は地表面より2.7mも下にある。

竪穴は淵より1.1mほど下がった中央から大木8bの完形土器が出土した。



第2図 竪穴略図

(3) 第3号竪穴住居跡

地表面から55cmのところに竪穴の輪郭が発見された。穴の大きさは東西2.1m×南北1.5mで、深さは1.55mあった。竪穴の上部から石匙1と石篋1とが発見されている。

(4) 第4号竪穴住居跡

地表面より60cmのところで竪穴の輪郭が発見された。東西1.05m×南北1.1mで、深さ1.2mであった。

(5) 第5号竪穴住居跡

地表面より50cmのところで竪穴の輪郭が発見された。東西1.9m×南北1.7mで、深さは1.45mであった。竪穴の部分より石匙2及び土器片発見。

(6) 第6号竪穴住居跡

地表面より55cmのところで竪穴の輪郭が発見された。径2.1mの円形、深さ2mであった。竪穴の部分から磨製石斧・敲石・土器片出土。

(7) 第7号竪穴住居跡

北半分だけ調査したものであるが、径2mほどで、深さ1.6mあり、表土は50cm。遺物無し。

(8) 第8号竪穴住居跡

これだけは別形式の竪穴住居跡であった。地表面より80cmのところに竪穴の床面発見。大きさ東西4.7m×南北4.5mの円形の竪穴で、中央より北西よりに石囲いの炉があった。炉は四角に囲った炉であった。

その炉の発見された床面から復原可能土器2点・石皿1点が発見された。

なお床面には都合26ヵ所柱穴らしきところが発見された。

(9) 第9号竪穴住居跡

第8号住居跡の床面に、中央東よりに径2mの円形の竪穴の輪郭が確認された。深さ1.3mあった。

これは第1～7号までの住居跡と同種のものと考えられた。なおそれにつづいた東側にも竪穴らしいものがあり、これを第10号跡と考えられたが精細な調査は行わなかった。

V まとめ

以上、今度の調査の概要であるが、竪穴は当初予想したフラスコ状の小ピットの外、第8号竪穴のような竪穴住居跡も発見された。この第8号竪穴住居跡は縄文時代の普通の竪穴住居跡である。厨川地区では形のはっきりしたものとして最初のもので、県内でも特色ある竪穴住居跡の一つとして注目に値する。

その他、第1号跡～第7号跡と第9号跡の小ピット形の竪穴は、最近各地に発見されて、その用途について種々の論議があるようである。私はこれについて寒い季節にねぐらとして用いた竪穴住居跡で、日常に生活していたところではないとの確信をもっているが、その精細な論拠について稿を改めて述べることを予定しているので、ここでは触れない。この種の竪穴は盛岡市では山岸永福寺山と東中野小山県営住宅地、県内では江釣子村新平と北上市樺山で発見されている。胆沢郡宮沢原遺跡の竪穴もこの一種である。縄文時代前期末から後期初頭までつくられ、使用されている。本遺跡は縄文時代中期後半のものである。

本調査にあたって種々の連絡に当たられた市教育委員会中村和蔵係長、調査の実施に当たっては久保泰・菊池忠昭両君の外岩大日本史研究室の学生一同、城西中学校及川教諭と社会科研究部の生徒、第三高等学校社会科研究部田代耕作君などに大変世話になったことを書き添え厚く感謝の意を表する。

1968.11.6

(昭和43年11月8日 岩手大学歴史学研究室 盛岡市上田三丁目岩手大学教養部)